

COSMOS集



研修医が点滴入れるコツを訊く看護師歴三十年の吾に

タンブラーに一本さして夫と見る初めて採りしアスバラガスを
紋黄蝶二頭が交差しつつ舞ふ菜花摘む吾と夫のあひだを
教壇へ戻る日のためウィッグ買ふ化学療法受けたる友は

花卉の中 寺田 静* 神奈川

花束は一華一華の花のむれ群れを離れるおとこに渡す

おくるわれおくられるきみの手の先に鬱金香の黄の花はあり
われわれの未来のごときうすらやみ鬱金香の花弁の中は
きみ去りし後のデスクの日めくりの暦はきみの去りし日のまま
目瞑れば腕は翼となりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけり

四月の散歩 駒形 周 子* 東京

文化とは自然発生するものか国書国書と声高に言う

身が軽く忘れ物した気分するコート脱いだ四月の散歩
藤村を漫画で読める時代なり、破戒のテーマ今も身近に
補助輪もつけず幼児こきこきと薫風纏い自転車をこぐ
十年の日記を見つつ目標を立てる四月の気持ち様々

ただのプラ片 柳井 政 則* 兵庫

財布には入らぬカード五十枚輪ゴムで束ね待機させおり
九枚のカードを財布に差し入れる今日のスタメン選ぶがごとく

キャッシュカード、クレジットカード 通帳に現金なければただのプラ片
財布には五十万円あるつもりカード払いの限度額なれど
スマホさえあればカードも要らぬらし電池切れれば無一文になる

ミルク色の斑

三 沢 左 右 大 阪

「あすなる集」特選

特別な一日生きむと思へども買ひ物籠にきのこのバック
わざと避けたわけにはあらず散歩道ポストのまへをよぎることなし
歩きゆく黒猫の腹ふるひつつミルク色の斑見え隠れせり

手に羽虫吹かんと見れば羽欠けてしばしそぞろに指に遊ばす
深更の公園をゆく 足下にビターチョコレートのやうな土踏み

てんたう虫

杉 本 な お 静岡

不審者ではありませんよといふ顔でてんたう虫を追ひかけてゆく
似た色の糸をさがして付けなほすボタン やつぱりちよつと違ふな
口笛を吹けばとほくで鳴きかへす鳥よおまへを騙してごめん
にんげんの住むには夜が深すぎる鳥獣保護区に咲くやまざくら
露の葉をゆらして水の流れゆきこれから川の始まるどころ

点滴のコツ

橋 本 照 美 三重

若き日の別れを思ふぼろろんとゑんどう豆がボールに落つれば

風のあとさき

大久保 ますみ 鹿見島

岩つつじ陽をとどまらせ咲きてをりそよげる風を脇役にして
音やはくパイア、バナナの葉の戦ぎ見蕩れてをりぬ風のあとさき
雨を得て路に繰り出すでむしが五、六匹ゐてみな角かざす
深靄もなかなかによしわが庭の無料の樹々を覆ひ尽くして
十キロの米の袋を持ち上げてをさな児抱きし感覚戻る

なるようになる

石塚 恵 子*香川

畦道の土筆つつん ばあちゃんの白寿の祝いの集合写真
老眼鏡なんか要らないという葎でスマホに撮って拡大しており
正座して経を唱えて三十分足がしゅわしゅわするよと男の孫
ししゅう入り濃い桃色のランドセル羽乃のお部屋に花のいろ満つ
〈なせばなる〉努力を重ねる時は過ぎ今ほどつぶりへなるようになる

託麻原本通り

下城 公 秀 熊本

母つひの住み処となるか新たなる有料老人ホームの五畳
色白となりたる母は九十五センチマットのベッドで過ごす
凹凸の歩道の振動心地よし空気を充たし漕ぐ自転車は
祝古稀の色紙を贈りともに飲むO氏元プロ競輪選手
取り毀つビルまだ多し地震から三年託麻原本通り

川鶴 百羽

中島 涼 高知

つらなりてかたち変へつつ冬空を川鶴百羽の一団がゆく
ちひさきは放つと老いら解禁に今し捕りたる天魚を見せる
境内にかしは手あはす氏子らに小賀玉木の白花散りく

五つ玉あはぬと母はしかめ面確定申告帳簿をめくる
春の雲に乗つて来たるやつばくらめ電線の上にわが家をのぞく

手動計算機

青木 淳子 鳥取

ゆるびたる心を月に見られをり旅の湯に入るをみな五人
酒店の輸入ワインはすましましるて素人われを見下すごとし
フランスもチリも見知らぬ土地にしてラベルの美しきワインを選びぬ
旧式のレジ開く音に大正の手動計算機ありし日おもふ
入社して出合ひし手動計算機は大正生まれ黒光りして

母の寝息

内山 春美*千葉

腰痛の母ゆつくりと立ち上がる生まれてすぐの仔馬のように
おだやかな母の寝息に今日ひとひ頑張つたねとつぶやき帰る
病室に母を残して宵の帰路枝なき公孫樹滲みていたり
街角の春を装うウインドーにダウン姿のわれ映り込む
南中の下弦の月に春時雨 腰痛む母は眠りいるやら

タッチパネル

森本 順子*兵庫

君と行きし阿寒湖摩周湖屈斜路湖二十歳のころが時折り浮かぶ
検査室の看護師やさしく説明すスカーフのごとふわつと包みて
支払いも機械化となり病院のタッチパネルは話をしない
なにげない言葉が胸につきささりポーカーフェイスの口もと歪む
棘のある言葉を言いてその人は平気な顔でコーヒーを飲む

雲のひとひら

東坂 小夜子 神奈川

木にとまる小鳥の群れのごとく見ゆ辛夷のつぼみ膨らみ始め

パパの肩に顔をのせたる幼子のまぶたが重いとおりり眠い
頬紅をうすくつけたる顔をして白きつぼみの並ぶ梨園

クレーンは空に伸びをりふはふはの雲のひとひらつかまへたくて
玄関にぬぎ捨てられた夫の靴つかれて帰りし跡の見えたり

車窓の景色

幅寺博光 北海道

冬コート脱げて嬉しや地下街に桜咲かずも花なるをみな
久方の旅にしあればもの思ふ車窓の景色に浮かぶ来し方
防衛はどこまでやるが防衛が七十四年の不戦あやふし
飼ふことも畑を耕すこともなく他人が作りしモノ食ひて老ゆ
恋慕とは受苦と知りたり今更にとほき面影たちくる卯月

風鐸の音

高橋光子*静岡岡

二千年の眠りから覚め兵馬備今なお任務を解かれずに立つ
兵馬備いずれも異なる面持ちに整然として我をねめつく
西安の都大路は鈴懸の街路樹太く広々とあり
鐘楼と鼓楼に守られ西安の城門通過す大型バスで
三蔵法師の經典収める大雁塔の涼やかなりし風鐸の音

鶺鴒のこゑ

北 祐二郎 佐賀

春陽に藍色ふかく光りあて小窓のステンドグラスのピエタ
蒼天にあはき裂傷ひがしへと向ふひかうきの翼のあとに
春浅き夢殿にわが影ゆれてとほき青空に鶺鴒いかるがのこゑ
春の夜の渡月橋より子のLINEそびらの空に満月写る
西行の桜の歌をしたためるけふは硯の海の深く見ゆ
わだつみも棚田もオレンジ色となり暮れゆく丘に鳴らす鐘の音

収 穫 福島 美穂 宮崎

洞爺湖のほとりに宿を取りし夜遊覧船より火花を見たり
この春はうぐひすの声多く聞く何か異変と先を危ぶむ
独り来し公園の桜散る中に白き石楠花の満開に会ふ
花吹雪撮る人桜を仰ぎをり吾は地に咲く野草を撮りぬ

「野草二種」ひめはぎ」に「がな」携帯に撮りてこの日の収穫とせり

花びらを呑む

新納よし*栃木

平成の天皇結婚記念日の四月十日に綿雪のふる
ゆきがふる雪はふるふる満開のさくら並木に花びらのごと
風ふけば遠き空より雪のごと花びら降り来る屋根に道にも
だいこんの紫の花の群をぬけウグイスシジュウカラのこえ聴く
強風に唸り暴れる鯉のぼり五つの口は花びらを呑む

頭光らせ

内山紀子*茨城

雪椿の最後の輪落ちし時チゴイネルワイゼン聞こゆる心地す
風にのるにぶき海鳴り枕辺に聞きつつ寝ぬ春風邪ひきて
梅散りて桜に間のある夕まぐれ夫は同じこと何回も聞く
朧月薄暮の空に笑えまいつつ遠田の蛙聞いているらし
春空の傾く日ざしに鴉一羽頭光らせ風に乗りゆく

骨に届け

鈴木涼子 東京

馴染みたる丸きポストが変はりたり角型ポストの明るき朱色
気温差の激しく今日は晴れあがり骨に届けと手の平かざす
三月で無料が終るごみ置場かけこみのごみ倍に増えたり

空豆の皮は実よりもかさばりてカラカラに乾しごみ嵩減らす
文旦の立派な皮をこみにせずピール作りを我は張り切る

四時間の断水 井上喜美子*山口

道筋に小旗をふりて大勢が両陛下見送る 平和で良かった
誰ひとり欠けずに終れるそれだけで幸でありしよ我が家の平成
令和には多分孫らの結婚と老いし我らの終いもありや
訪ね来し独りぐらしの老人の話尽きない三度茶を汲む
工事にてたつた四時間断水し被災地になる体験重し

真白き花 斎藤のり子 岩手

看護師に呼ばれ立ちつつスマホより眼を離さざる男 中年
受診待つ長き間合ひにレース編むをみな咲かせり真白き花を
平成のゴム印出てきぬ机より仕事と介護の日々もありたり
かれ草の間より芽生える雑草は低きも高きも背すぢ伸ばせり
入学の一年生は一人とぞ一四五戸のわが地区老いる

母百一歳 佐藤道子*秋田

朽葉踏み坂道上り見上げれば冠雪光る鳥海山かなた
閉ざされし記憶の扉あけようと夫は夢中で今日もメモとる
右指の爪切る時に和鋏を器用に使う母百一歳

オフよりもオン好き夫の歩く先電気の花が煌々と咲く
如月の弱き陽射しにつんと立つ松の葉先に地の鼓動見る

日々 篠山重威 京都

ペットボトル踏みつぶしては憂さはらす為すことのなく充されぬ午後

職退いて時の流れが遅くなり落日にわが長き影踏み

スーパリーの買ひ物はいつも二人連れ妻は杖つきわれは荷を持つ
亡き友が自ら庭に植ゑくれし椿の花の咲く日となりぬ
水道の工事で道を掘りかへす工夫に桜の花の散りしく

ぼた雪が降る 吉田初江 新潟

すがやかにカットの髪をそめし友人入院準備のひとつと言へり
海水の温度の上昇、原発のたいりやうはいすい一つ因とぞ
原発の所為と言はねど越しゆけり柏崎の友は遠隔の地へ
婆さんが植ゑしと兄さが切りくるるふつくら苔の白雪椿
枯れ笹がサササササと風に鳴りうのはなつきにぼた雪が降る

春の石段 氏家かね子 宮城

歌詠めば蛍のやうに吾灯る詠みてがんばる病の日々も
プランターの小さなビオラの春のうたこの幸せをお分けしませう
靴の紐結び直さむと足を置く春の石段ほのかに温し
空にゐる夫の散歩もこならんミレーのへ巻を見つめる今朝は
夫の余命長くはないと告げられき病院の桜満開の日に

深夜の読書 松浦一郎 山口

とろとろとシチュー煮ゆる間ラジオ告ぐソメイヨシノの開花宣言
川の辺の桜並木が満開と三人に言ふ 晴れわたる空
あるときはほろむやうにあるときは泣くやうに見ゆ遺影の父は
眠いのに寝られぬ夜はこちよき波音がする伏せた本より
スタンドの光が届くところまでわが世界なり深夜の読書
よく晴れて風の強き日うるはしき新元号は令和と聞けり

春はあけほの 内田 妙熊本

あめつちの庭ふところにわれありて太く息吸ふ春はあけほの
冷えふくむ春風のなかくぐひすのささ鳴き澄みて庭わたりゆく
冬眠の虫たち今夜目覚めむか雷鳴とどろく二つ三つが
春のうた聞えてきさうどうだんは鈴ふるやうにふるふると咲く
蒼天に煙となりて離りゆく従妹の八十八年の生

亡父の気配 関 康子 大阪

まだ来ぬか燕は来ぬか三月の空たのしみの父のこのごろ
独り居の父がわが家にちよいと来て昼寝するまゝ息絶えてをり
大正・昭和・平成を生き新元号樂しみのまま父逝きにけり
うたたねの続きのやうなる父の死を弔問客のみなが羨む
一度とて使はぬ介護保険証折り目正しく抽斗にあり
もこもここのもこ続きゆく花の道今年は亡父の気配と歩む

ペアルック 伊藤 祐楓*茨城

「その二集」特選

「これ好きよ」と女房も言う真夜中にウォーターサーバーが水を飲む音
あの人とおそろいの香水買っちゃった目には見えないペアルックだぜ
生きてゆく、それは似ている温かなお皿が冷めゆく時の速さに
怖いほど眠れぬ夜は蜂蜜をほんのひと匙分けてください
「日が暮れた」そんなことまでカーナビに告げられる日々人肌恋しき

水紋ふたつ 印出 美由紀 神奈川

つま弾けば火影のごとく響きたりギターは女性名詞で呼ばれ

つくばひて花壇の花を摘む庭師ふたりの鉄の音が連なる
橋の下の暗き水路にかかるがもの二羽が咲かせる水紋ふたつ
ひこばえの桜は咲き児らを呼ぶ男先生の声も咲きて
菜の花に音符のごとく虻が飛びマナーモードの公園の春

被害者らしい 前中 映 東京

窓の外を鳥影ふたつ渡りゆきそのち早し冬の日暮れは
ご迷惑をおかけしましたと詫びてゐる人がどうやら被害者らしい
たぶんもう飛ぶことのない冬蜂と並んで午後の陽を浴びてゐつ
へゆりかもめループを下りてゆくとときにしづかな水の円形は見ゆ
冬晴れの武蔵野線に揺れながら深くふかあく眠つてゐたい

今は昔 鈴木 幸代 和歌山

切り倒し滲む樹液を口にして無言のままに立つ桜守り
何もかも今は昔となる事を桜の散れば気づくこの朝
ミント色光らせ走る自転車の子等列なして行く
辛き事多くありしを良き事も多くありしと母ボツリ言ふ
アラームの音に始まりアラームのセットを終へて今日をねぎらふ

春のうれしさ 土山 純子*兵庫

ポアンポアンと飛び跳ねるように鍵盤を弾いて君は今を生きている
父と子は初めてピアノ連弾し体触れあい心通わす
ピアノ弾き流れる音色は君の声話せぬ思いを曲に托せり
この先は口角上げてにこやかに生きれば何とかなると思おう
焼け落ちるノートルダム寺院入口の重き扉を手が覚えおり
プランターのサヤエンドウは次々と実をつけ春のうれしさ届ける

福耳ならず 水 辺 あ お 静 岡

朝焼は樺大樹を照らしたす巨大レントゲン画像のごとく
旅ならぬローカル線の朝夕を耐へがたくあし労働者われ
目のどこが動けばさうも変はるのか同じ女人の怒りと笑ひ
わが耳は福耳ならずからうじてマスクの紐がかかれるばかり
横綱の名を呼び上ぐる声響く西日の宿のテレビつければ

雪の富士山 高 山 幸 子*三 重

いつしかに足にてリズムとりている合唱団の春の歌よし
菜の花の咲きたるような衣装着けソプラノうたう君のまぶしさ
バスの客歓声あげて伸びあがるトンネルを抜け雪の富士山
芽吹き待つ山のしずけさ木のさやぎ浴びつつ歩む街までの道
クリームをうすくのばして磨きたりひと冬共に歩みしブーツ

忍びのやうに 樺 か 乃 広 島

俯きて坂道下るわれの背に忍びのやうに冷氣つきくる
脳トレの「ひらがな計算」ずんずんと平伏すやうに鉛筆握る
しなやかにヨガの修業をする青年足の裏まで素直なりけり
ただ生きることだけ思ふ眼差しは一直線なり鷺の佇む
さらしても煮ても静かにゐる気配夏みかんのジャムほろりと苦し

発車のたびに 池 部 聡 子*大 分

桜一輪咲くその下に姥桜弁当持参で賑いており
青空と交信するがにネモフィラは花卉をみな上に向けおり

子供等に忘れられたる土筆あまた喜びて摘むは古いし我のみ
火葬場で夫が焼かれしその時に生まれし孫は十七歳なり
無人駅に今年も菜の花咲き揃い発車のたびに大きく傾ぐ

友との会話 久 保 親 二*東 京

戦争を知る者知らない者共に酒酌み交わす桜の下に
生誕百年ちひろの描く子の目から戦火を睨む鋭さは来る
握りあう手と手を伝う温もりが酸素マスクの友との会話
旧友の唇潤す手向け水かさつく罅にしみ込みゆけり
呼びすてにしていし友の一人消え二人消えゆくかくれんぼのごと

ガラスウォール 橋 本 武 則*大 阪

去りてゆく鳥たち遠く見上ぐれば昼の月あり雁行をなす
春温し遥かに橋を見下ろせば列車も艇もいんぼのどかな動画
かたわらの妻の寝息のやすらげくわが安息を誘いにけり
妻と娘喫茶するらし買出しのながき暇は春いとま開けていて
高層のガラスウォールの耀えば春たけなわの夕映えとなる

三 色 井 新 明 恭 子*香 川

五日遅い、四日早いと予想する桜の開花を待つ国に住む
田の隅の田起し時給七百円男孫のバイト料金である
リハビリの帰りに柏餅を買い菜花の空の鯉のぼり見る
鯉のぼり泳ぐ菜花のうえの空今夜は三色井にしよう
やお歴ひと月のひと二十年寡婦の私を慰めており
産直できようが初もの米ぬかのおまけの付いたたけのこを買う